＜第 77 号＞2012 年 5 月 1 日

# AAINews

国際耕種株式会社
〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403
TEL/FAX ： 042-725-6250　　E-mail ： aai@koushu.co.jp
Home Page： http://www.koushu.co.jp

## 海の民の国・オマーンから
## ～マングローブと環境教育～

国際耕種とオマーンとの関わりは古くからあり、このニュースレターでもさまざまな機会に紹介している。今回はマングローブ生態系保全に関わる環境情報センター設立のための人材育成プロジェクトの一員として、オマーンを訪問した。『中東、湾岸、産油国』というと、最近ではドバイのイメージが強く、超高層ビルが立ち並ぶ近代的な街並みを思い浮かべるが、オマーンの首都マスカットは高層ビルもなく、建物の色調も白色を始めとしておだやかなものが多く、全体として落ち着いた印象である。

オマーンは他の湾岸産油国と比べて石油産出量も少なく、外国人労働者の比率も低い。これは外国人に頼らず、なるべく自国民を活用しようという「オマーナイゼーション」の成果でもある。役所が最もオマーナイゼーションが進んでいるようで、今回のカウンターパート機関である環境省の職員たちも、お茶くみのインド人以外はほとんどオマーン人である。以前隣国 UAE で仕事をした時に、ローカルのカウンターパートを見つけるのに苦労したことを思うと、スーパーマーケットのレジにオマーン人女性が座っているのを見たことは一つの衝撃でもあった。タクシードライバーもオマーン人のみで、さらに床屋もオマーン人限定にしようとしたが、これは怖いからやめてくれ（オマーン人の床屋では安心して髪を切ってもらえない）という反対がたくさん出て却下されたという笑い話もある。

さて今回の業務では、持続的なマングローブ生態系保全を進めるために、環境教育を実践・強化することが主な活動の一つとなっている。マングローブ林はさまざまな動物に生息環境を提供し、豊かな生態系を育んでいるので、マングローブ林を守ることがそうした生態系の保全や生物多様性を守ることにもつながっていく。マングローブを一つの切り口として、広く環境問題を考える、グローバルな視点を持つ次世代の子供たちを育てるような「場」を、現在建設を進めているマングローブ情報センターが提供していくことになる。

中東産油国と聞くと「砂漠の民」を連想するが、オマーンは海洋交易国として長い歴史を持つ「海の民」と言ってもよい。最盛期にはその領土は、現在のパキスタン西部から南はアフリカ・ザンジバル島にまで及び、多様な文化や異なる宗教を包含する広大な海洋帝国であった。古来オマーンはアラブに属しながら、インド洋を介してインド、パキスタンをはじめとしたアジア文化とも融合して、また遠くザンジバルまでを含むアフリカ圏との交流があり、外に向かって開けた国であった。

このように外部との交流を保ってきた歴史的背景のあるオマーンという国に設立されるマングローブ情報センターは、マングローブや環境保全に関するさまざまな情報を収集・発信して外部とつながっていくことも一つの重要な職務となっており、そしてこれはオマーンという国の立ち位置や役割にふさわしいものであると言える。

（2012 年 3 月　湖東）

オマーン環境省の概観

クルム自然保護区のマングローブ林（左）
ボードウォークを通ってマングローブ林観察（右）

子供たちのマングローブ植林体験（左）
環境ゲーム～マングローブ・エコシステム理解（右）

# 援助からビジネスへ～支援から協働へ ＜その 5＞

## *JICA 筑波帰国研修員との連携に“ビジネス”は考えられるか？*

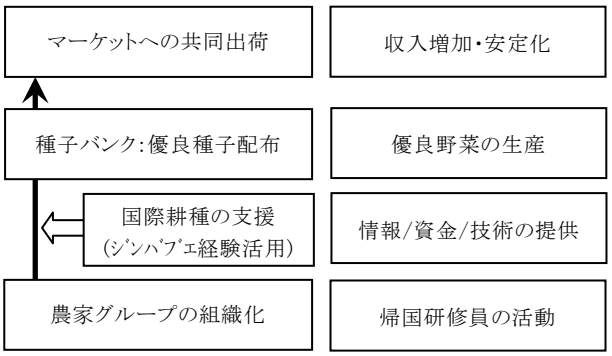
これまで国際耕種がJICA筑波で研修をおこなった野菜関連コースと陸稲品種選定コースの帰国研修員数は 212 名をかぞえ、我々はこれを人的資産（asset）としてとらえている。帰国後おおくの研修員はおなじ所属先にもどり、普及員として、学校の教師として、試験場の研究者として業務をつづけている。そして異動や昇進をしていく。そんな研修員の帰国後の業務については、「遠くて近い国の友人たち-国際耕種の研修フォローアップ事業」（AAINews 70 号、71 号、72 号）で報告した。ここでは、灌漑グループを組織化して、灌漑受益農民に野菜栽培を指導したり、農業学校でトマト栽培を教えるザンビアの帰国研修員たちやネリカ品種の選抜をしたり、雨季作トマト生産に努力するマラウイの帰国研修員たちを紹介し、帰国研修員らのネットワークを活用しながら将来共同でなにか小さなプロジェクトをはじめていけないか我々の夢をつたえた。

ほかのアフリカ諸国の帰国研修員をみると、在職しながら学士や修士や博士などの学位をとるもの、出向して国連機関ではたらくもの、いままでの所属先を辞めてNGO や半官半民のバイオ会社に転職するものもいる。それでもかれらの業務の対象は、都市で成長する産業の恩恵を受けることのない僻地の農村部に住んでいる大多数の小規模な農家である。

帰国研修員は農家が直面している問題（社会課題）に取り組んでいる。我々も一緒にこれを解決しながら同時に利益の追求もめざす。農家、帰国研修員、我々の三者が得をする取り組みを探しながら、win/win/win の「三方よし」をめざしたい。利益がすくなくても出資金は確保できるビジネスはできないだろうか。農家の生活がどれだけ改善されていくかという観点でビジネスを考え、農家のニッチなニーズに対応する小規模なビジネスが農家の収入を増やすひとつの効果的な方法ではないだろうか。帰国研修員のアイデアを我々が経済面で支援し、仕事への使命感による動機づけによって、農家へのサービスの届け手として活動してもらう。

たとえば、ザンビアの帰国研修員は灌漑農家を組織化して野菜栽培を指導している（AAINews 71 号）。彼らに対して「種子バンク」による優良種子を配布してより品質のよい野菜を栽培し、スーパーマーケットなどへ販売して収入増加をめざすことが考えられる。この場合、以前我々がジンバブエ南部で現地 NGO と連携しておこなった「種子バンク・プロジェクト」の経験を生かすことができる。この種子バンクでは町へのアクセスが悪い農家にかわって優良種子を購入する。種子を受け取った農家はこれを栽培・販売してから、種子代金を種子バンクへ支払うというものだ。種子代金を確実に回収することによって、種子購入の原資を確保しながら種子バンクを現地 NGO は運営してきた。

現在帰国研修員 212 名のうち 152 名には AAINews が年 4 回届いている。われわれの知見としての情報・技術を引き続き発信しつづけ、媒介者（catalyst）としての役割をしていきたい。




**ザンビアの帰国研修員支援のイメージ図**

**種子バンクプロジェクトのメンバー**

**メンバーによる共同管理圃場**

**プロジェクトのミーティング**

# クルドの農業と農民 ＜その 5＞

## *イラクの農民気質と農業普及*

AAINews 70 号でも紹介したが、クルドの農民は良い意味で非常におおらかで、突然の訪問者である我々を暖かく歓迎してくれた。クルドの人々は、一般的に親日的であると言って良いだろう。

このおおらかさは、別の意味で農業活動の中でも感じられる。つまり、多くの住民が農業に従事している中で、収益の観念が若干欠如しているようにも感じた。「どれぐらい儲かる？」、「どれくらい生産しているの？」と言った質問には、ほとんど明瞭な答えは得られなかった。クルド地域では多くの住民が農業者である一方、多くの農民が農業からの収入だけではほとんどの場合生活維持は困難なようだ。天水でのコムギ栽培農家では、「今年は雨が不順でほとんど収穫は無理だ」と微笑みを含みながら答えてくれた。また、農業収入が少ない場合は「ペシャメルゲ」で働かせてもらうとの話もよく耳にした。ペシャメルゲとは、クルド自治政府の軍隊で、伝統的にこのように呼ばれている。

クルド地域の多くの農民は大家族である。農業以外にも、親の年金、農民の農業外収入、そして子供らの労働などを寄せ集めて、家計を維持している。農家の多くは、前述したペシャメルゲへの一時的な入隊で収入の一部を支えており、政府もこのような雇用を通して、農民収入の手助けをしているように見受けられる。詳しくは知らないが、かなり簡単に入隊できるように感じた。

一方、このような不安定な農業生産を改善するため、政府の農業普及への努力は強く感じられる。普及所の話では、農民への講習会、現地視察、デモ圃場での展示紹介など各種の対策を行っているとの話であったが、一方でその効果が充分かという懸念も感じられた。普及方法は、普及機関での研修や、農地でのデモンストレーションと聞く。その対象農民は地域の指導的農民が多く、中小農民までの取り込みには至っていない場所があるようだ。また、農業普及用の資材（パンフレットや栽培マニュアル）などは農民の手元には全く見られなかった。クルド内の普及機関からの聞き取りでも、講義は講師まかせで、また講義用の資料も普及機関に保管・蓄積されていない。農民の一部は読み書きも不充分であることを考えると、適切な普及材料の作成と配布体制の確立は必要であろう。

このような中、農業資材会社の普及活動は一定の役割を担っていると感じられた。見聞した農業資材会社の普及事例では、資材会社が資材の販売と共に、技術提供を行っていることは前にも紹介したが、このような資材を売る側と、使う側の連携が一部で見られる。また、グリーンハウスの販売資材店では栽培指導マニュアルの作成を検討していると聞いた。さらに、新たな作物生産に必要な機材を資機材を買える資金的余力を持っていない農民に提供し、そのかわり農民圃場はデモ圃場として、資材会社の広報の場になっている事例もある。

別の事例で、あるNGOが野菜栽培の普及活動を行っていた。資材は NGO が提供し、地域の農業技術者を雇用し、地域単位で農民の参加を呼びかけている。農民は圃場維持に一定の労働力を提供し、収穫物から得られる収益を皆で分ける。NGO の技術者に聞くと、最大の課題は老人の説得であったと聞く。若者は比較的容易に参加するが、老人は共同作業による栽培活動について理解が得にくいと聞く。しかし、このような取り組みは今後の普及活動の良い事例として考えられないだろうか。

これまで普及活動に関与の少なかった研究機関も近年、普及活動に積極的に参加するようになってきている。栽培技術を振興する研究機関の普及業務への参加は重要である。ただ、普及活動と研究活動は視点が違うことから、これらの架け橋への支援活動が重要と考えられる。イラクの穀倉地帯であるクルド地域で、大らかな農民が、少しでも農業で自立していく支援を行えればと考える。

山間部の NGO 栽培活動地

果樹農家の聞取り

民族服を着た農家

ミニシリーズ

# 乾燥地域の植物あれこれ ＜その 4＞

シリーズの第 4 回目として、アラビア地方では最も一般的な食べ物の一つでもあるヒヨコマメ(アラビア語でホンモス)を紹介したい。

アラブ首長国連邦の古都アルアインにある試験農場で働いていた 1970 年代の中頃、我々現地研究員の宿舎の近くにお気に入りの食堂があった。白いワイシャツに黒いパンタロン姿のお兄さん達が給仕をするちょっと小奇麗で小洒落たレバノン・レストラン。そのお兄さん達と友達になったこともあって、昼は毎日のように通っていた。そこで最初に覚えた料理が、ホンモスとムタッバルとタッブーレ。ホンモスはゆでたヒヨコマメにニンニク、練り胡麻、オリーブオイル、レモン汁等を加えてすりつぶしたペーストで、これをホブスと呼ばれるアラビアパンに付けて食べる。ホンモスとパンと漬物は注文したメインの料理が出てくる前にテーブルに並ぶので、ついついパンをちぎってはホンモスを付けて口に運ぶ。これがなかなかうまい！常に腹が減っているその頃の我々研究員はいつもこれを食べ過ぎて、メインが出てくるころにはお腹がいっぱいなんてことも度々。ムタッバルは同じようなペーストを焼きナスから作る。これもうまい！これの方が日本人受けするかも知れない。タッブーレというのは、細かく刻んだイタリアンパセリにタマネギやトマトそしてブルグルと呼ばれる挽き割りコムギを混ぜた、ちょっとおしゃれなサラダ。この名前は、タッブーレ、タッベーロですぐ覚える。

ホンモス

ムタッバル

タッブーレ

アラビア語で単にホンモスというとヒヨコマメそのもののことを指す。この豆を手に取ってじっと眺めていると一粒一粒が本当にひよこみたいに見えてきて、ヒヨコマメと呼ばれる所以がよく分かる。中近東で暮らすとヒヨコマメ以外にも、豆類を食する機会が多いと感じる。その中でも特に有名なのが、エジプト人が大好きなフール。これはソラマメのこと。ドバイの農水省で働いていた頃のこと、事務所で仕事をしていると朝っぱらからエジプト人がいきなり机の上に新聞紙を広げ始める。今日はフールの朝食だ。柔らかく煮込んだソラマメをオリーブオイルとレモンで味付けしたシンプルなこの料理をみんなで囲んで、ちぎったホブスに付けて食べる。こんな朝食パーティーが結構頻繁にある。そして、スープなら何と言ってもシューラバ・アダス。シューラバはスープ、アダスはレンズマメのこと。特に暑い夏、シューラバ・アダスにレモンを絞り込んで食べれば、夏バテ解消間違いなし！中近東で暮らす限り、このようにいろいろな豆たちと付き合っていくことになる訳だが、湾岸にいる間はホンモスの畑を見る機会は無かった。

収穫したヒヨコマメ

1990 年代中頃、シリアの地中海に面したタルトゥースという町から小舟に乗って、沖合にあるアルワード島という小島に渡った。フェニキア人が住み始め、十字軍の拠点ともなった歴史的な島だ。船の中では子供達がなにやら小さな実の付いた植物を持っていて、緑色の実を莢から出しては食べていた。何かと聞くと、以外にもホンモスという答え。ペーストしか知らなかった私の緑色のヒヨコマメとの衝撃的な出会いだった。その後農業普及局の職員と一緒に現地に出かけた際、農家の畑から失敬してきた緑のホンモスをつまみながら調査をする機会が幾度となくあった。緑のヒヨコマメをつまむのはこの国の春先の風物詩のようだ。日本人が夏、枝豆で一杯やるのと似たようなものかも知れない。

緑色のヒヨコマメ